読書メモ２０１８年６月号

水谷武司著

『東京は世界最悪の災害危険都市』

（東信堂・2018 年）ほか

柳沢克央（やなぎさわかつひろ）　編

（信州・上田仮説サークル）

2018 年 6 月 23 日（土），6 月例会用レポート

◇はじめに―「よい本が・たくさんあって・困るほど」

前回までの「読書メモ」と同様，サークルで発表することを目的とすると，読書がはかどるので，今回もこのメモを作成しました。自身のため，記録を残すことが第一目的です。みなさま，よろしく（適当に）おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり，引用あり，要約あり，感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。（私物）と書き添えてあるもの以外はすべて篠ノ井高校および屋代高校図書室蔵書。

◇5 月号で読んだ本

◎本多静六著『私の生活流儀〈新装版〉』（実業之日本社・2005 年）（オリジナルは 1951 年刊）（私物）

◎福原義春著『生きることは学ぶこと』（ひらく・1997 年）

◇今月，読んだ本

◎青木やよひ著『ベートーヴェンの生涯』（平凡社・2009 年初版刊・2018 年復刊）

〇彼（ベートーヴェン）の性格は，その才能の輝きに完全に一致している。あれほど純真な（子どものような）天性が，あれほど力強く，また豪胆な意思と結びついているのを，私は生涯で見たことがない。…その心の内奥で彼は，あらゆる教育を乗り超えるよ

うな自然の脈動によって，善にして美しいすべてのものに愛着している。（ヴァイセンバッハ『ウィーン会議への旅』）（198 ペ）
〇あれほど自然を楽しむ人に，生涯出会ったことがありません。花や雲やあらゆるものに強い喜びを見出していました。つまり自然は，彼にとって心の糧のようなもので，その中でこそ真に生きているように見えました。野原を歩きながら手頃な場所を見つけると，緑の土手にどこにでも腰を下ろし，自由気ままに思考を展開させていたようです。（イギリス人チャールズ・ニートの言葉）
＊1815 年夏，当時のベートーヴェンの日課は，早朝から午前いっぱい仕事にはげみ，昼食後は夕方までニートをつれて散歩に出る…というものだった。（199 ペ）

＊

ベートーヴェンの信仰に関する考え方の記述が興味深いので引用して紹介しておく。

＊

〇ベートーヴェンの祈りの対象は，時にはキリスト教的人格神であり，時には多様な非キリスト教的神だったと指摘し，そうしたさまざまな宗教概念に対する彼の自由で偏見のない受容は，ロマン主義と啓蒙主義に典型的なものだと説明している。ここには，ユダヤ人としてのソロモンの好ましい宗教的寛容が見られるが，彼はなぜかロマン・ロランその他の研究者と同様に，ベートーヴェンのフリーメーソン的な側面にはまったく触れていない。

フリーメーソンは弾圧を避けるために，秘密結社として組織を守ってきたため，その全容を述べた歴史書が少なく，時代によってさまざまなイメージが持たれている。だが，発祥はピラミッドを築いたエジプトの石工（建築家）組合と言われ，〈自由・平等・友愛〉の精神をもとに，人間の生きるよりどころとして連綿と続いてきたものと考えられている。

十七世紀後半から十八世紀にかけて，教会の権威に対する批判としてのフリーメーソンがヨーロッパの知識人の間に深く浸透し，啓蒙主義の普及と共に一つの時代潮流となってゆく。アメリカの独立戦争やフランス革命を支えたのもその精神だった。君主ではオーストリアのヨーゼフ二世やプロイセンのフリードリッヒ大王，文学者ではゲーテやシラー，音楽家ではハイドンやモーツァルトなどがフリーメーソンの会員であったことはよく知られているが，ベートーヴェンについては，その入信記録は見つかっていない。

だが，ベートーヴェンの場合，ボン時代はもとよりウィーンに出てからも，リヒノフスキーやブルンスヴィック，あるいはエルデーディ夫人やズメスカルなど，そのパトロンや友人のほとんどがメーソンであり，彼自身のアイデンティティーにメーソン的な思想基盤があったことは疑いない。それにもかかわらず入信しなかったとすれば，彼は思想信条は共有するが，いかなる集団の掟にも縛られたくないとする独特の自由精神の持

主だったと見ることもできよう。そして 1812 年までは，唯一絶対の〈神〉とその他の多様な〈神々〉とは、彼の信仰心の中で混交しつつ共存していたのではなかったろうか。（229 ペ）

＊

本書のヘソと思われた記述を次に引用。

＊

…最後の四重奏曲群では，作曲家はもはや自我の主体者として語ることはない。かくれた神々の手が奏でるような高度で自在な音楽技法を駆使しながら，自らは一個の矛盾のかたまりのまま，星々の輝く天空の下で宇宙という大洋に身をゆだねて，時にはそれと戯れているかのようだ。この神秘的で静謐さにみたされた世界―かつて二十歳そこそこの私がそれに打たれたのはなぜか？　人間存在の究極の意味がそこに感じられたからだ。長い人生の間には喜びも絶望もあり，そして人は誰しも過ちをおかすものだろう。しかし最後まで，人間を超えた大いなるものに対して敬虔であるように努めること，それが生きる意味だ，と。

そしてベートーヴェンのこうした音楽表現が，近代的自我を至上とする西欧人にとっては，なじみにくいものであることは理解できる。どこか東洋的な〈悟り〉や〈解脱〉に通じるものがあるからだ。だが意外なことに，これらの四重奏曲は同時代人たちに，無理解のうちに捨ておかれたわけではけっしてなかった。作品 127 も初演に失敗しただけで，ベートーヴェンのきびしい監視下で練習を積んだ第二回目は，「嵐のような大成功」だった。次の作品 132 は練習の段階で，すでに立ち会った関係者や演奏者たちを魅了してしまった。公開初演が行われた 1825 年 11 月 6 日には，会場の音楽協会ホールには空席一つなく，聴衆は作品の美しさに征服された。特に「神なるものへの感謝の歌」に人々は圧倒されたという。日を置かずに再演がくり返し行われている。…（245 ペ）

＊

…二十世紀前半のフランスでこれらの四重奏曲を高く評価し，その楽曲分析を詳しく行ったロマン・ロランは次のように述べている。

…すべての作品は共に深い詩情にひたされ，その一つ一つが，あるいは叙事的，あるいは叙情的，あるいは劇的な一個の詩，精密かつ緊密に作られている点では，言語によって書かれたもっとも美しい詩に匹敵し，しかもそれ以上に深く意識下の世界にまで入り込む一個の詩となっている。…

ベートーヴェンが〈音詩人（トーン・ディヒター）〉とよばれるゆえん」がここにある。（245 ペ）

＊

この文章を読んで，早速，ベートーヴェンの弦楽四重奏曲を聴きたくなった。これか

らすぐに注文しようと思う。

◎ジェニ・ウィルソン他著・吉田新一郎訳『増補版「考える力」はこうしてつける』（新評論・2004 年初版発行・2018 年増補版発行）

興味深い本である。特に次に引用する部分に興味を引かれた。

＊

…言うまでもなく，調べ学習のほうは，ゴールに到着した時点で終わりです。調べ学習派の人たちにサイクルを回すという発想はないと思われます。そのこと自体，教育のことを考えていないような気がしてしまいます。

少し前のことですが,「調べ学習」と「探求学習」の違いを表すのに最適となる文章を見つけました。以下のような文章です。

We want them to understand that there is a difference between search and research a parallel distinction between knowledge and learning.

「う～ん，まったくその通り！」と言わざるを得ません。違いは,「search（探す）」と「research（研究・探求）」にあるというのです。では，その違いとは何でしょうか？「search」は「探す，見つける」という意味です。ニュアンスとしては，すでに存在するものを，となるでしょう。つまり，すでに答えのあるものを調べて見つけるということです。

それに対して「research」は「search」の前に「re」を付けただけなのですが，意味がかなり違ってきます。「熱心に／徹底的に研究／探求／調査する」という意味です。すでに分かっていることを見つけることよりも，よく分かっていないことを調べるというイメージです。言葉を換えれば,「探し直す／調べ直す」と捉えることができます。それも，繰り返し何度も行っているような感じがします。さらにそのプロセスを楽しんでいる雰囲気までうかがえます。

「調べ学習」の」ほとんどは前者です。すでに本やネット上に答えが出ているものを「調べる＝探す，見つける」だけです。ひょっとすると,「切り貼りする（コピペ)」とさえ言えるかも知れません。決定的なのは,「考える」という部分が限りなく少ないということです。というか，ほとんどありません！

英文の後半部分は，とても含蓄があると言えます。「search」は，よくて「知識」，悪いと単なる「情報レベル」です。言うまでもなく，両方ともすでにあるものです。それに対して「research」は「学ぶこと」だと書いてあります。要するに,「調べ学習には学ぶことが含まれていない」と言っているのです。単に，すでにある知識や情報を見つけている／探しているだけ，というのとです。

見つけることや探すことも，もちろん探求することの一部ではありますが，それをす

べてと捉えてしまうと「まずい」ということです。その割合はどのくらいなのでしょうか。扱うテーマによって違うでしょうが，多くて半分，少ないと 10 分の 1 ぐらいではないでしょうか。それほど「見つける」や「探す」以外の部分が大切だということです。（197 ぺ）

＊

本書でもう一つ特筆すべきは，オーストラリアでの初版 1993 年の時点においてすでに「メタ認知」の重要性を説いていたことである。

本書を読んで，仮説実験授業研究会の故・西川浩司さんの実践を思い出した。授業書の学習を終えた後，テストを行って全体を振り返ること，新聞づくりをすることなどの教育方法は，本書の内容を先取りする方法であり，改めて見直す必要があると思った。仮説実験授業研究会の研究成果は教育界における「未採掘の巨大金鉱山」のようなものではあるまいか。

もう一度借り直して読みたい本である。

◎幸田露伴著『五重塔』（岩波ワイド文庫・2001 年）

言わずと知れた名作。ワイド文庫の活字の大きさは本当にありがたい。パッと見て非常に美しい文語で綴られていることが判った。熟読する機会を逸し，図書館から催促されて急ぎ返却。こういうこともある。次の機会を必ず作る。

◎水谷武司著『東京は世界最悪の災害危険都市』（東信堂・2018 年）

タイトルを裏付けるデータおよび対策が論理的に紹介された本。構成は整然としており，説得力がある。索引が充実している。著者の筆は終始冷静である。まえがきにある，私から見た本書の結論と思われる部分を引用する。

＊

〇日本列島は地震帯・火山帯・台風来襲域・多雨地帯に位置する。このように多くの危険条件が重なるのは，地球上のきわめて限られた地域だけである。したがって日本では，これらの災害誘因の作用を可能な限り避けるために，より安全な土地を選定して利氏などを立地させることが，地域の安全をはかる基本になる。すでに危険な土地に立地している既存市街地については，移転・移設はまったく容易ではないので，建物・施設の耐用年数が過ぎる数十年～100 年先を見通した国土土地利用計画によって，より安全な立地の実現にむけ長期的に誘導していくことが求められる。これは地方振興にも大きく寄与する。

現行の防災対策は，防災構造物の建造，建物の耐災害性強化，予報・警報と避難の態勢などが中心となっているが，これらがリスク低減の機能をもつとは限らないし，また，

危険のとくに大きい地域・地区では災害防止効果はあまり期待できない。それにもかかわらず低成長時代を迎え目先の経済効率を優先しようとする風潮は，危険な居住・土地利用を一層助長している。日本の総人口は減少の方向に転じたが，これは都市への人口集中を一層激しくする可能性がある。

したがって，土地利用の制御などによる自然災害リスク軽減の長期的対策は，東京はもちろんのこととして，他の大都市などにおいても急務であると考える。ただし，日本の政治・行政の現状では，これを待っていたら次の災害がやってきてしまう。せめても意識ある企業や個人が立て替えなどの機会を利用して，個々に危険地脱出を図るのが，一つの現実的な自衛的対応策と考える。このための意識啓発の目的の一つとして，本書を記した次第である。(「まえがき」より)

＊

○…東京下町低地は面積が約 250km^2（ジャカルタの 1/5）と広いものではないが，ここの災害リスクは世界のどの巨大都市圏よりも大であり，防災面からみればいわば巨大なスラムとしかいいようがない。この国は防災先進国を誇っているようだが(根拠は薄弱)，防災土地利用からみれば後進国以下のレベルだ。このことは東日本大震災の津波災害においても再度示された。現在直面している復興の困難は，著しい危険地に都市・集落が立地していて原地復帰ができないことに根源がある。地震動は避け得ないのに対し，津波は土地条件選定により避けることのできる現象なのだ。

発生がきわめて不確実であり強大な破壊力をもつという自然の事変に対しては，ハードな手段による力づくでの対抗は効果がきわめて限定的であり，危険から遠ざかる，危険地を避けるなどの回避方策により災害脆弱性を極力低減させる対応が基本になる。防災の現状はなぜか避難が中心となっているが，これは人命への危険だけを一時的に回避しようとする限定的・消極的対応なのだ。明らかな高危険地においては，住居・施設ごとの“避難”，つまり移転・移設による危険の抜本的解消が基本でなければならない。人の避難はその実現までの過渡的対応に位置づけられるものだ。都市機能・経済活動・人口などの地方分散は，国土の効率的利用および地方振興・過疎対策の面でも望ましいことだ。しかし現実は全く逆で，目先の経済性を優先し，耐震などの技術を過信して，東京一極集中をさらに進め，災害リスクを超巨大なものにする企てが依然として進行している。

分かりやすい例を示そう。最近巨大なタワーが建造され連日多数の人を集めているが，ここは軟弱沖積層の厚いゼロメートル低地で，関東大震災のとき震度 7 の強震動が生じて多数の建物が倒壊し，次いで全面消失したことで数万という大量死者がでた地区の真っ直中にある。たとえタワー本体の耐震性が設計上は高くしてあるとしても，大きな振幅の揺れは必ず生じ，周辺の施設は破壊され，交通・通信路は絶たれ，このタワーが集

めた多数の人々を危険に陥れる。なお耐震技術については，建物が高いほど周期の長い震動に共振するということは力学の初等知識であるにもかかわらず，超高層建物を林立させてから新しい事実のように長周期震動を問題にしているという不可思議な現実がある。

また，4 年に 1 回のスポーツイベントを招致し各種競技施設・関連施設を，こともあろうに土地条件劣悪・社会環境脆弱な湾岸地区を中心に建設するという企てがなされており，防災面からはおよそ考えられないような事態だ。誘致するのはよいとしても，なぜ他都市で開催できるように努力しないのだろうか。多数の人を集め，以後も集め続ける施設の新設はこの東京を避けて行われねばならない。都内の他地区においても，再開発なるものによってさらに施設・構造物を建造し多数の人を引き寄せようとしている。

かつて防災観点からの首都機能などの移転が真面目に議論されたこともあったようあが（形式的には引き続き検討中），現在はそのような気配は全く消え，逆に都心回帰といわれる人口集中が進行し，災害リスクをさらに増大させている。首都直下地震による想定被害が 100 兆円を超えるといったような試算が示されていても，自治体や公的組織はこのようなマイナス面からはことさら目をそむけようと懸命に努力しているようだ。東京を世界一の都市にすると都の主張が宣言したことがあるが，すでに世界一である自然災害のリスクを小さくすることが，まず取り組むべきことであろう。…（「序論」より）

＊

本書にざっと目を通して，ここでも「メタ認知」および「俯瞰」そして，「仮説実験的認識論」が重要であることを痛感する。

すなわち，その地点または地域の①歴史的背景，②地理的条件を学び，③将来を見通した上で現実的にできることを考察，想像し，④計画的に実行していくという普遍的な方法論が重要であることを痛感した。

そして，これは教育行政や国家運営にもそのまま拡張敷衍できる方法論であると感じたこともメモしておく。

◎向山洋一・前田康裕著『まんがで知る授業の法則』（学芸みらい社・2016 年）

教師としての上達論が惜しげなく公開されている。これで 1800 円+税という価格設定は激安だ。TOSS に完全に共鳴していない教師でも買わなければ損をする本だ。

向山洋一氏の運動論や上達論はすぐれている。そして，きちんと元をたどれば，「先行研究」として仮説実験授業の研究論と組織論がその基礎のうち，かなりの部分を占めていることを確認することができるだろう。

漫画という手法はとても有効だ。意図することを言葉よりも速く，強く読者に伝えることができる。もちろん，内容による面があるが，伝えたい内容を映像化することは非

常に大切なことだ。映像化は有効だ。

◎糸井重里・古賀史健著『古賀史健がまとめた糸井重里のこと。』（ほぼ日文庫・2018 年 6 月 6 日最新刊）

〔表紙紹介文をそのまま引用〕コピーライター，糸井重里の半生をまとめた「自伝のようなもの」。国際的ベストセラー『嫌われる勇気』を手がけた古賀史健に導かれ，糸井重里が気持よく語った幼少期から「ほぼ日」上場に至るまで。ふたりが語る場に居合わせることができるような，優しい文体が心地いい。

○「ムーミン谷」からの卒業

株式上場について考えはじめたのは，10 年以上前ですね。

理由はいろいろあって，訊かれるたびに違うことを言ったりしているんですが，「おとなになりたかった」はおおきいと思います。ぼく自身，若いころはヒッピーみたいな生活をしていて，働きはじめてからもそれは変わらなかった。お金のことも，将来のことも，なるべく考えないようにして生きてきた。おかげでほぼ日をつくってからも，入ってくるのはヒッピーみたいな子が多かったんです。そこはもう，そういうぼくの姿を見て，入ってくるわけですから当然だと思います。

ただ，そういう人たちがたくさん集まると，よくも悪くも会社が「ムーミン谷」みたいになっていくんですね。人里離れた山奥にある，やさしい妖精さんたちの村に。まあ，ムーミンたちは歳をとらないからいいけれど，社員はみんな歳をとっていくわけでしょう？　そこはなんというか，50 代や 60 代のムーミンはせつないぞ，という思いが強かったんです。いつまでもヒッピーじゃダメだろう，というか。

そんなふうに思いはじめたところ，よその会社の名刺にやたらと「ISO9001 認証取得」とか「ISO14001 認証取得」というロゴを見かけるようになりました。知り合いの社長さんに訊いたんですよ。これはなんですか，国際標準化機構（ISO）の認証規格だと聞きましたけど，こんなの面倒くさくないですか，ほんとうは意味ないですよねって。すると社長さんが言うわけです。

「これを取得すること自体には，特別な意味はないかもしれません。でも，こういうルールを知って，社会的に認められた会社であろうと身を正していくプロセスのなかで，会社の空気が変わっていくんです」

つまり，対外的な PR の一環として取得しているわけではなく，社員の意識を変えていくために導入しているんだと。この視点はおもしろかったですね。それで ISO ナントカを取得するのはうちには合わない気がするから，上場をまじめに考えてもいいんじゃ

ないかと思うようになりました。上場に向けて動き出すプロセスそのものが，ムーミン谷からの卒業につながるんじゃないかと。

〇乗組員を鍛え，自分を自由にする

さっそく岩田聡さんに相談してみたら「うん，それもひとつの方法ですよね」と言ってくれました。「ほかの道も探せばあるでしょうが，上場はひとつの方法だと思います。糸井さんだったらできるでしょうし」って軽く言うんですよ。そうだな，岩田さんという先輩の存在はおおきかったですね。

その後，いろんな人たちが「上場したらこんないやなことがある」とか「こんだけ不自由になる」とか「株主総会なんて生きた心地がしないよ」とか，ありったけのデメリットを語ってくれました。上場していない人たちも含めてね。でも，ぼくは岩田さんからそのへんの愚痴を一度も聞いたことがないんです。任天堂の株価が下がったときだって，株主総会がつらいとか，出たくないとか，岩田さんはひとつも言ったことがない。それはぼくにとっておおきな希望でした。ほんとうにつらかったら，正直に言ってくれるはずですから。

そして社外取締役の山本英俊さんは「それ以外の道はないでしょうね」という答え。

自分は映画や漫画など，エンターテインメント関係の人たちと接してきて，すごい才能を持った人たちがつぶれていく過程を山ほど見てきた。クリエイターは，自分の才能を生かすためにも，自分を大事にしてくれる組織をつくらないとダメなんだ。そして，その答えは上場でしょう，というのが山本さんの意見です。

これはぼくの実感とも一致するところが多くて，やっぱりクリエイティブって，本質的にわがままで，理不尽なものなんですよ。天使と悪魔でいうと，悪魔こそがクリエイティブを発揮する。ハリウッド映画でも，ヒーローもののアニメーションでも，あるいは『MOTHER』というゲームでも，悪役のほうがクリエイティブでいられるんです。だって，まわりの迷惑を考えずに動きがとれるから。

でも，クリエイターが組織のリーダーを兼ねるようになると，天使でいなきゃいけない。悪魔的なわがままを，自制しなきゃいけない。わがままだけじゃ社員が育たないし，会社の空気が悪くなるだけですからね。

だから上場は，社内を鍛えていくためでもあるし，いろんなものを譲り渡して，ぼくらを自由にするためでもある。どんな苦労が待ってるかわからないけれど，やらない手はない，と思いました。CFO としてネスレから篠田真貴子さんを迎え入れたのもその一環だし，彼女にもちゃんと，入社前の段階で「将来，上場しようと思っています」と話しましたよ。ものすごく反対されましたけど。（167 ページ）

◇次回以降の予告

◎阿刀田高著『新約聖書を知っていますか』（新潮文庫・1996 年初版・2016 年 25 刷）
◎佐藤剛著『美輪明宏とヨイトマケの唄』（文藝春秋・2017 年）
◎島地勝彦著『神々にえこひいきされた男たち』（講談社＋α文庫・2017 年）（私物）
◎左巻健男他著『理科の実験安全マニュアル』（東京書籍・2003 年）
◎森田敦史著『なにもしていないのに調子がいい』（クロスメディア・パブリッシング・2016 年）（私物）
◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』（仮説社・1987 年）（私物）
◎八代目桂文楽著『芸談あばからべっそん』（ちくま文庫・1992 年）（私物）
◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（日経 BP クラシックス・2010 年）（私物）
◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』（光文社新書・2011 年）（私物）
◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』（平凡社ライブラリー・2017 年）（私物）
◎西鋭夫著『國破れてマッカーサー』（中公文庫・2005 年）（私物）
◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』（河出書房新社・2013 年）（私物）
◎立川談志著『努力とは馬鹿に恵えた夢である』（新潮社・2014 年）（私物）

◇まとめ･つぶやきなど

〇通勤途中に歩きながら思いついたこと。カウンセリングというのは結局，クライアント（対象者）が自身のメタ認知を行うのを促す作業である。要するに話としてアウトプットさせる過程で対象者は自分自身を客観的に認識するのであり，これができれば，これからどうしていけばよいかが判るという仕組みなのではないか。だから，話を聴くには忍耐が要るとかなんとか難しい理屈があるが,そんなことはハッキリ言って二の次で,対象者が話をする流れを邪魔せずに聴いていけば，問題が解決する方向に向かうというカラクリなのではないか。メタ認知は生き方そのものだから，トラブル回避や解決，授業の上達，学校（会社等の組織にも適用可）運営，人付き合い，事業の成功，良い文章を書くこと，文化祭での組織的活動など，いろいろなことを上手く行うための解決策となるはずだ。メタ認知を高めることが大切だ。仮説実験的認識とメタ認知の両輪で進むことが大切だ。〔6 月 8 日（金）8:05〕

〇「この指とまれ式」の補習組織論の構想。

　従来の補習の問題点は次のとおり。

・生徒の「学力実態」に差があり，どのような問題を取り上げ，誰を焦点にして話して

いいか，ハッキリしない。
・一方通行の授業。
・名簿を作っても回を追うごとに生徒が無断でぼろぼろ減っていく。
・特に追跡をしないため，成果がハッキリせずに終わる。
　これをなんとかしたい。そこで次のような方法を考えてみた。
・受験勉強は「話を頭に詰め込んでおいて吐き出す」のではなく，「聴いた内容を自ら使いこなして問題を解決してゆく」ものであること，つまり本人が自分の力で進めていくものであることを徹底的に理解させる。
・それでもなお，補習を希望する者には労を惜しまず対応することを伝える。
・生徒自身が自主的に動くことをねらって新しい補習組織論を実行する。
・発起人生徒（1 名～数名）が賛同者を募って「参加者名簿」を作る。
・補習希望者がいない場合は個別質問対応。
・発起人は柳沢と打ち合わせをして講義内容を決める。
・授業はインタラクティブな（活発なやりとりがある）のが理想。
・数回の授業をした後で総括し，活動の終了または継続を決定する。
・以下，この作業をくり返していく。
このプロジェクト名は「フォアグラから地鶏レバーへの変身」。実現なるか…。〔6 月 14 日（木）10:40〕
〇上記とは別に，モチベーションを上げるための補習を構想した。
・解説のみの授業は緊張感が高まらず，効果が薄いように感じられる。
・まず，なぜいま勉強が必要かについての講義を行う。
・次いで具体的な勉強法の講義を行う。
・以上の講義の後で，質問者を募ってオープン・カウンセリングを行う。
・勉強法が分かった者は自分で勉強を始めるので，参加者は回を追うごとに減る。減らなければ意味がない。
・最終的な形は「受講者がいなくなること」である。（学校に通う目的は「通う必要がなくなること」＝「卒業」。「チョークアートは消されて完成する」）
・その後は個別質問対応で回す。〔6 月 14 日（木）10:50〕
〇（よく勉強する・まあ勉強する・勉強しない）中学生→（よく勉強する・まあ勉強する・勉強しない）高校生→（よく勉強する・まあ勉強する・勉強しない）大学・短大・専門学校生→（よく勉強する・まあ勉強する・勉強しない）社会人，という展開。3^4 通りの組み合わせが可能。まったく勉強しないままで大人になるのが最悪とは限らない。それよりも「子どもの時に勉強していたのに，大人になって勉強しなくなる」パターンの方が大きい問題ではないか。

〇自己評価について。板倉聖宣氏の幸福論「絶対自己的自己賞賛」は「メタ認知」ではないか。絶対自己という者を設定して，その絶対自己を判断の基準として自分を褒めるという生き方は，客観性を実現できる。この生き方が核になって「仮説実験的認識論」が出来上がっていったのではないかと考えてみた。

〇ある一つのイベントを取り上げてみる。(例：文化祭での活動，授業，演奏会，ダンス，試合など何でもよい）これについて①準備が（良・普通・不良），②当日の活動（良・普通・不良），③まとめが（良・普通・不良）で考えると，27 通りの組み合わせが考えられる。これらについて，何か面白いことが考えられるのではないか。たとえば，準備が不良で当日の活動が良ということはどういうことだろうか。準備をよくすれば，もっと充実した結果になるのではないか…など。

〇無印良品の良品計画会長，金井政明氏の講演を元に考える。ある活動が発生し，収束するまでのパターン。①革新→②繁栄→③形骸化→④衰退（没落）。あらゆる歴史的な運動に共通しているプロセスといって良いのではないか。戦後の高度成長以後の日本の工業および学校制度の歩みを考えるときにある種の感慨を覚える。〔以上，6 月 14 日（木）11:48〕

〇6 月 18 日（月），19 日（火）に屋代高校理科の科旅行へ行ってきた。その模様については別に発表させていただく予定。その際に詠んだ詩をディジタル化しておく。「三猿を見て襟正し／華厳の瀧の飛沫浴び／銅製錬と絵に学び／絹糸の往時偲ぶ旅」〔6 月 22 日（金）13:00，これから印刷製本。終わったら年休をとり，トレーニングで鈍った体を引き締める予定〕